「イヨウ、來た〳〵、早う逃げ」
「卑怯者待て、逃げるとて逃がす物か」
可愛相に松さん、芝居の衣裳で裾に綿が澤山這入て有る、其れを二枚も重ねて着て居るので、足に纏い付いて走れん、木の根に躓づいて轉んだ、首筋を掴へられた。
「コリヤ、逃げるとは卑怯で有るぞ」
「御兄弟の方々、現在敵に出合ながら、逃げるとは血迷ひ召されしか、お待ちなされ」
「どうぞ命ばかりはお助け」
「お助けでは御座らん、如何なされしぞ、中村氏、犬侍に傷は御座るか」
「傷は御座らん、御兄弟の方々は」
「御兩人共傷は御座らん、無傷と無傷なら勝負は五歩だ」
「イエ、六部が參りません」

――終り――

埼流庵漫筆

桂米之助

昨日から降り止まぬ薄ら冷い雨の中を、隣りのお爺さんが頭巾の附いた舊式の外套を頭からスッポリ被てせつせと蜜柑箱に土を詰めて居る。朝顔の苗床を造るのだとの事冬あたりから腐土を作つたり馬糞を拾て來たり中々大ていの手數ぢやない。やがて移植、灌水、防風、驅虫と散々世話を燒いて結句幾つの花を見るのかと問うて見ると、一本あたり精々三つ。四つも咲かせる事は先づ尠ないと云う。へえー、隨分心細いんですね。朝顔の花なんて半日しか咲いて居ないぢや有りませんかと云ふと、なアに、ほんとうの花の色を見るのは朝の二時間位、あとはもう見るが程のものも無いとの咄。私は驚いた。およそ割の悪い仕事も隨分あるが、たつた二時間や三時間樂しむ爲に、幾月と云ふ長い間よく夫れだけ毎日々々、丹精する氣になれますねと云はざるを得ない。

「いや。遣て見ん人は皆そふ云ひますがナ、そうぢや無いんですよ。これが幾日も保つ花なら恐らくこんなにまで世話は出來ませんね、たつた一朝限りしか咲かないんだから、成る可く美事に咲かせてやり度いと思つて、夢にまで見る位氣になるんですよ。」

ほゝう。そんな物かなア。成る程こりやア遣て見ん事にはどうしても呑み込めない理窟らしい。

「お爺さん。あんまり長く雨に打たれて居ると毒です